

豊かさとソーシャル・キャピタル

新谷大輔 海外情報室研究員

豊かさを測る

「戦後60年」。日本は第二次世界大戦における敗戦から奇跡的な復興を成し遂げ、さらにその経済力では米国に次ぐ規模となった。急速な工業化によって、人々の生活は豊かになった。お金さえ出せば何でも買える時代となった。GDPは米国に次ぐ第2位の規模であり、それだけで言うならば日本は世界で二番目に豊かな国ということになる。

ところが、豊かさという指標を異なった観点で見ると、日本はさほど豊かではない。豊かさを測る指標としてよく用いられるものに、国連開発計画（UNDP）が発表している、「人間開発指数（HDI；Human Development Index）」というものがあるが、これは図表1にある基本となる3つの要因を指数化し、ランキングを発表するものである。この2004年度版報告書によれば、日本は第9位にランキングされている（図表2）。GDPの額は2位であり、平均寿命は1位であり、識字率も高いけれども、総就学率は42位と低迷していたりする。

また、英エコノミストが発表したランキングは「暮らしやすさ」を指標化しているが、これは世界111カ国の一人当たり国内総生産（GDP）や政治の安定、治安、衛生状態、家庭生活などを基準に割り出したものである。昨年11月の発表では、この中では1位はアイルランド、2位スイス、3位ノルウェーで、上位10カ国のうち6位のオーストラリア以外は欧州の中小国で、日本は17位にとどまった（図表3）。

アイルランドは人間開発指数では10位であるが、この暮らしやすさを測る指標では1位となっている。同誌はアイルランドの評価について世界第4位の一人当たりGDPといった経済的な豊かさもさることながら、非常に興味深いのは「家族や共同体の温かいつながりを維持していること」を高く評価していることである。

アイルランドはパブの発祥地として知られ、大人も子供もパブに集い、コミュニケーションの場としての機能を果たしている。そうした素地も作用しているのだろう。家庭生活やコミュニティに関する評価が人間開発指数との違いを生み出したものと思われる。

図表1：人間開発指数の3要素

要因	指標	指数
長寿で健康な生活	出生時の平均余命	平均寿命指数
知識	成人識字率 ----- 総就学率	教育指数
人間らしい生活	一人当たり実質GDP (PPP USドル)	GDP指数

出所：『人間開発ってなに?』UNDP2003年7月P.9

豊かさの意味

さて、このように経済的な豊かさ以外の要素を、豊かさを測る指標として組み込むと、豊かさの意味はかなり異なってくるのが分かるだろう。では、そもそも豊かさとは何なのだろうか。貧困を測る指標というのはいくつか存在するが、これまで国際社会においては貧困を一人当たりGDP、すなわち年間所得が200ドル未満といったように、所得水準で区別してきた。

確かに、そうした国々に住む人々は裕福とは言えないだろう。食べることもままならないこともある。ところが、実際に最貧国といわれるような国を訪れてみると、本当にこれが貧困状態なのか、と感じる人が多い。確かに先進国に住むわれわれとは全く異なる生活をしており、単純な比較からすれば豊かとはいえない。ではなぜ、貧しさを感じないのか。

そう、豊かさの基準が異なるのだ。彼らは彼らの身丈にあった生活があり、文化があり、習慣がある。その中で暮らす彼らには所得の差に表れない、豊かさの基準がある。

エンタイトルメント

ノーベル経済学賞を受賞したインド出身の経済学者アマルティア・センは貧困を再定義した。センの思想の根底をなすのは、ケイパビリティ論という考え方だが、その基礎として「エンタイトルメント」という考え方がある。エンタイトルメントとは、すべての人間が、ある社会の成員として原初的に所有する権利から獲得されうる財サービスへのアクセスを指す。また、人々は互いのエンタイトルメントを交換し合うことによって自らの厚生を高めていく。

図表 2 : 人間開発指数 (HDI/2002年)

	HDI	平均寿命 (歳)	一人当たりGDP (PPPUSドル)
1 ノルウェー	0.956	78.9	36,600
2 スウェーデン	0.946	80.0	26,050
3 オーストリア	0.946	79.1	28,260
4 カナダ	0.943	79.3	29,480
5 オランダ	0.942	78.3	29,100
6 ベルギー	0.942	78.7	27,570
7 アイスランド	0.941	79.7	29,750
8 米国	0.939	77.0	35,750
9 日本	0.938	81.5	26,940
10 アイルランド	0.936	76.9	36,360

出所 : Human Development Report 2004より作成

図表 3 : 暮らしやすい国・地域ランキング

上位20カ国				主な下位国	
1	アイルランド	11	シンガポール	60	中国
2	スイス	12	フィンランド	65	モロッコ
3	ノルウェー	13	米国	71	インドネシア
4	ルクセンブルク	14	カナダ	80	エジプト
5	スウェーデン	15	ニュージーランド	92	南アフリカ
6	オーストリア	16	オランダ	93	パキスタン
7	アイスランド	17	日本	105	ロシア
8	イタリア	18	香港	108	ナイジェリア
9	デンマーク	19	ポルトガル	110	ハイチ
10	スペイン	20	オーストリア	111	ジンバブエ

出所 : The Economistより作成

すなわち、センのいう貧困は原初的に所有する権利から獲得され得る財サービスへアクセスできない状態を指す。貧困状態というのは所得の問題ではなく、本来、人生で享受できるものが受けられない状態なのだ。この考えはいまや、開発援助の世界では主流になりつつある。

この考えが的を射ていると考えられるのは、貧困というのは同じ基準で語ることができないものであることを認識している点にある。エンタイトルメントの内容というのは、各国・地域、コミュニティそれぞれで異なるものであるため、同じ貧困といってもそのアクセスの観点から考えれば、価値観は全く異なってくる。

もちろん、アイルランドは発展途上国というわけではない。では、貧困をエンタイトルメントの観点から考えた場合、豊かさとは何なのか。

物質的に恵まれている先進国においては、その生活の質を単純に途上国と比較すれば、効率的で楽な生活をしていることは間違いない。インフラの整備状況も先進国では水道や電気が通っていない地域はほとんどない。

そうした状況下における「豊かさ」とは生活の質ということになるのだろう。心が満たされているか否か。生きていて楽しいか否か。センはエンタイトルメントの交換によって、人々は自らの厚生を高めていくと言うが、これはつながりにほかならない。アイルランドが1位に選ばれたその理由において、家族や共同体の温かいつながりを維持していることが挙げられていることは、まさにエンタイトルメントの交換が密であることを示している。つながりは豊かさの指標なのだ。このつながりこそ、ソーシャル・キャピタルである。

相互扶助の精神

アイルランドは人と人のつながりが評価され、トップに選ばれた。では、17位の日本はどうだろうか。都市部ではマンションも増え、隣にどんな人が住んでいるかも分からない、という状況が当たり前となった。家庭内暴力、引き

こもりが社会問題となり、人間関係に悩み、将来に不安を持った小学生も増えた。つながりが希薄になっているといわれて久しい。

戦後60年という節目に日本の豊かさを問うときに、日本のコミュニティに古くから培われてきた姿を省みると、そこにはアイルランドの豊かさにひけをとらないであろう、つながりによって構築された豊かさを今も見ることができると。そのヒントは「相互扶助」にある。

東京都狛江市に「むいから民家園」という築200年以上の古民家を再生した建物がある。町の再開発に伴い、取り壊される予定にあったこの古民家は、その町の住民にとってシンボリックな存在として残すべきとの市民運動から保存に至ったものである。そして、この古民家は復興された今、市民が集うコミュニティスペースとして大いに活用されている。

それだけでもつながりを生む場所としての意味はあるのだが、この古民家が特徴的なのはその再生の方法にある。実はこの古民家再生は市が補助金を拠出してはいるのだが、単にプロに依頼するのではなく、多くの市民が自主的に草刈り、土壁塗り、屋根ふきなど、市民それぞれができることを出し合うという相互扶助の精神に基づいて行われたのだ。古くは普請講と呼ばれた仕組みが使われたのである。

かつて、日本のコミュニティではこうした相互扶助の風景はどこでも見られたものである。とはいえ、つながりが希薄になっている現代社会においては、それを実行することはそう簡単なことではないだろう。しかし、この民家園のように市民の自主性を導き出すような仕組みさえあれば、つながりはできる。

日本は豊かになった。しかし、戦後60年を経た今、これまで日本人が追い求めてきた豊かさとは別の豊かさがあることに気付く時なのかも知れない。スローやLOHASといったライフスタイルが流行を見せるのも、豊かさの再考の一つだろう。日本が真の意味で暮らしやすい国となるために、人と人のつながりを意識してみようだろうか。